

# 垂水史談会報

第43号  
2022(令和4)  
年3月発行  
垂水史談会

## 【報告】

### 「垂水城と殿様水」に新しく看板設置

このたび、旧垂水城の麓の標柱の近くに『垂水城と殿様水』の看板が新たに設置されました。



### 大正噴火の『本城川外六河川改修記念碑』などの記念碑四基が市の指定文化財に

3月8日、教育委員会定例会に於いて大正噴火に伴う4基の記念碑等が垂水市の文化財に指定されました。内容は以下の通りです。  
大正3

(1914)年1月12日に桜島が大爆発し、流れ出した熔岩により大隅半島と陸続きとなりました。同時に大量の火山灰な



どが風下の大隅半島、特に牛根、垂水方面へ降り積もりました。そのため、その後の降雨のたびごとに土石流や泥流によって引き起こされる河川の氾濫、洪水は田畑や家屋を洗い流し、死傷者を出しています。

『本城川外六河川改修記念碑』は当時の垂水村内の七つの河川(本城川、田上川、市木川、是井川、中俣川、飛岡川、鶴田川)改



修工事(大正4年4月から翌5年3月まで)竣工を記念して建立されました。  
同じく水之上地区の手貫神社境内にある『記念碑』、下市木の『耕地整理記念碑』は、その後桜島降灰の土石流によって被害を受けた耕地の改修等を

記念して建立された石碑であり、先人たちの苦闘の歴史を物語る史跡です。さらに大野地区公民館敷地内の『土地所有権移轉記念碑』は桜島や垂水の被災民が移住したことを記している歴史的な記念碑ともなっています。



## — 研究ノート —

### 終原大根について(二〇二一年作)

付 中谷潤心



今ではあまり見かけなくなった、終原の地大根。根の上部、三分の一くらいは赤色をしていたというが、私が作ったのはあまり色が出なかった。収穫した大根は、豚



バラ大根・味噌汁・サラダにして、二〇二一年二月の日曜礼拝の際に、門徒さんに振舞った。来年も作ろうと思う。

自家栽培の終原大根を食べた後、地元の方に終原大根を貰った。  
左の写真はその大根を水で洗った状態。鮮やかな濃い赤紫が映える。



る。自分が作った終原大根はもつと葉っぱが大きく、緑も濃く、細か

イトゲがあった。根の長さは肥部が三〇cm程度。周囲の太さは六〇cm以上あって、両手でも包みきれない。この大根、色合いだけで言えば、サカタ交配の「あやめっ娘」という品種に似ている。しかし、ほか畑の終原大根も見せてもらったが、終原大根は一般の大根より、かなり大きく太くなるようだ。肉質は緻密で歯ごたえもよく、長く炊いてもまったく煮崩れしない。

【お知らせ】 — どなたでもご参加ください —

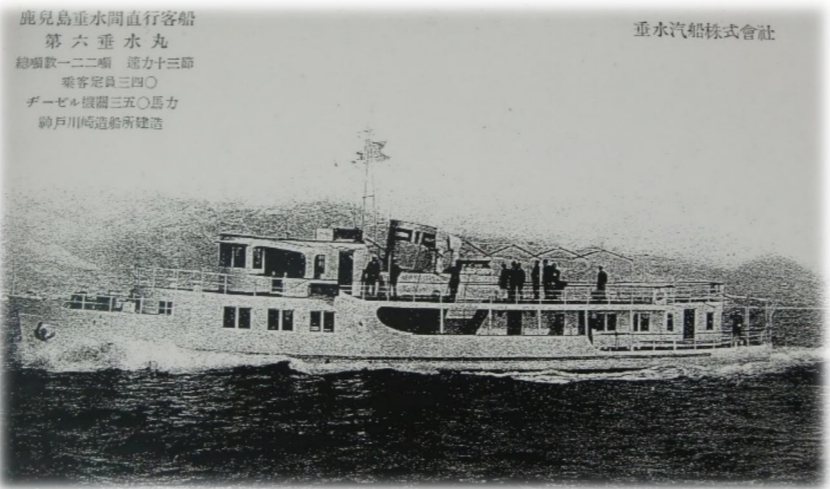
毎月第四水曜日午後六時半から、垂水市民館で垂水の郷土史や文化財などについて、定例の勉強会を行っています。

『垂水市史』の読み合わせが基本ですが、資料を持ち寄っての勉強も行っていきます。また、市内に残る文化財や史跡めぐりなど、現地研修を行うこともあります。

【垂水市史料集（十三）より】

## 『垂水丸遭難に寄せて』② 室屋新七

まもなく鹿児島市からの船が着きました。船から降りて来られた根占の兄宅の隣の中村広先生と久し振りに逢ったので話しているうちに、列の中に四、五人入られましたので川元先生を見失ってしまいました。乗船する時「女は船底に、男は甲板に乗ってくれ。」と指示があり、外側に吊してある階段を昇りました。甲板の椅子にポストンバッグと小包を置いて中段の船室へ下り、見まわしましたが、川元先生は見つからず、大勢の人が入って来たので、ようやく岸壁に出て再度乗船し、甲板に昇り荷物を煙突の元に置き椅子に腰掛けました。上空では飛行機が三、四機で訓練をしていました。岸壁では出征兵士を見送る音楽隊や日の丸の旗を振って見送る人々で賑やかでした。また、鹿児島市の四十五連隊の兵隊さんに面会に行く人、鹿屋航空隊に面会に行く人、日曜日で買い物に行く人々が沢山乗船しました。「今日は、こんなに沢山の人が乗るが転覆する様な事はないかな。その時は人から離れないと溺れる」と予感がしました。



船が動き出して岸壁を離れ、暫くすると船が動いてきたので驚いた人々が動き出しました。私は「動くな、動くな。」と、大声で叫びましたが、船は元に戻らずどんどん傾いていきました。私が荷物を取って船の手すりの所に来た時は、船体は四十五度くらいに傾いていましたので、そのまま海に飛び込みました。海水を一口飲み、遮二無二泳ぎました。早く自分を取り戻そうと思って焦って歌を歌いたくなり、

「ハッ」と我に返りました。海水の温かさに比べ、海上は微風のせいで体を上げると寒さを感じました。その時、関釜連絡船で救命具の着け方の指導を受けたことを思い出しました。私は手荷物のポストンバッグと干し大根、花の種の入った小包が浮力となつて流れていることが出来ました。ポストンバッグの中には栓をした一升瓶と反物の裏地が入っていました。

気持ち少し落ち着いてきました。周りには沢山の人が溺れていました。掴み合いをしている人もいましたが見る見るうちに見えなくなり、流れている私の所へみかん箱が流れて来ましたので、そばで泳いでいる人に「これに掴まりなさい」と渡しました。

遠くで何かに掴まっている根占の黒木さん姉弟が溺れたので「流れていなさいよ。」と大声で叫びましたところ、大声で応答してききました。救命板に取りつく人々が争っていました。陸地では焚火の煙が立ち上がり、私はこれで助かったと思つて嬉しいでした。漁船が何隻も漕ぎ出してきて溺れた人々は次々に救出されました。私は「助けてくれ」と言いましたが、「暫くまっていたくれ」と言われたのでそのまま流れていました。垂水丸は転覆していて何人か船腹に立っているのが見えました。私も間もなく小舟に引き揚げられました。

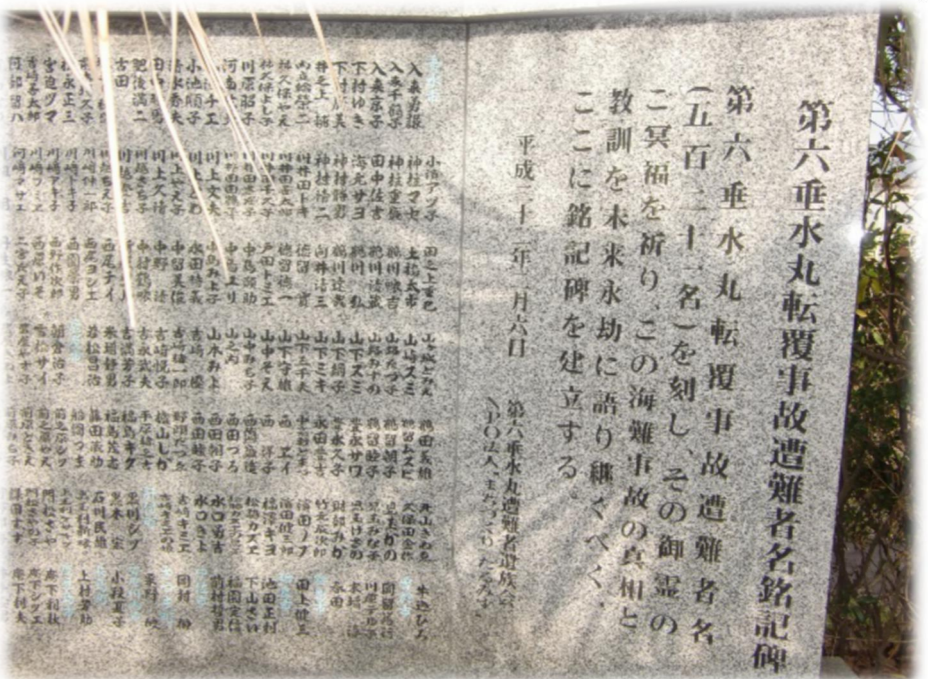
陸に上がつてすぐ、朝乗つて来たバス運転手さんの尾ノ上栄吉さんに正夫さんと川元先生の安否を尋ねましたが分らず、事務所でも分りませんでした。バスの運転手さんが着ていたシャツやズボン下を貸して下さったので体が暖まりました。

根占では垂水丸転覆の知らせが入り、サイレンが鳴ったそうです。バス停前で店を経営していた兄の家へ巡查さんが駆け込んで来られて、今朝バスにだれだれが乗つて行ったかと聞かれたそうです。兄たちは消防自動車に乗って駆け付けてくれました。途中、私の乗ったバスと皆倉峠で出会つて無事を喜び合い、そのバスで根占へ帰りました。黒木さん姉弟は助かりましたが、正夫さんは亡くなられたそうです。川元よし先生は船底で亡くなられて、腰ひもで足をくくり乱れぬ姿で見つかり、夫人の鑑（かがみ）と称賛されました。

一週間してから鹿児島市へ行く時、また垂水丸に乗りましたが、お亡くなりになった大勢の方々のことを思うと可哀そうでなりません。私もあの時、中村先生と立ち話をしていなかったら命を落としていたかもしれないです。その日、遺留品置き場で私の中折れ帽子は見つかり、頂いていきました。

その後、結婚をして妻と再び中国へ渡り、昭和二十年八月五日終戦となりました。中国南昌から九江、彭沢で集団生活をし、昭和二十一年六月十五日引き揚げ船で上海を出発して六月二十三日に博多港に着きました。懐かしい日本の山々を目の当たりにしたときは感涙にむせびました。

垂水港には垂水丸遭難の慰霊碑が建立されていますので、その後何回か参拝いたしました。また、一昨年二月六日は五十年忌が行われるとのことでしたので、垂水のお寺に参拝してお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りいたしました。平和な日本の尊さをしみじみ味わい、ありがたい国だと思えました。八十四歳の今日、五十年前の垂水丸遭難の記録を皆様に読んでいた



けるようなものではありませんが、私の記憶のままにしたためました。  
ありがたさをかみしめてペンを置きます。

一九九五年五月

—(この項おわり)—